

年報第3号
『人類文化研究のための
非文字資料の体系化』

2006年3月発行 A4判 392頁
編集・発行：神奈川大学21世紀
COEプログラム研究推進会議



内容：＜論文＞文化情報発信システムとしてのインターネット博物館（佐野賢治）民俗学研究のための情報発信（木下宏揚）文化政策としての民俗博物館（丸山泰明）『模地数里』に描かれた松前（菊池勇夫）風俗表現における図様の伝統と創造（金貞我）台南道教の符篆について（丸山宏）「渋沢フィルム」撮影地の景観変貌（浜田弘明）韓国におけるコロナアルタウンの景観（須山聡）
＜研究ノート＞感性の人類学のための予備的覚え書き（川田順造）中国内蒙古の若者の身体形状の特性（芦澤玖美）モーションキャプチャを使った芸能比較研究の試み（廣田律子、長瀬一男、海賀孝明、岡本浩一）蘇った納西族東巴教「求寿」儀式（夏宇継）北京市都心部および郊外農村の景観変容（藤永豪）教会大学と日中戦争（王京）「姑蘇繁華図」に見る清代前期の江南地域における紡績業及びその流通（彭偉文）住みつける意思（土田拓）
＜調査報告＞旧朝鮮の神社跡地調査とその検討（津田良樹、中島三千男、金花子、川村武史）

第1班公開研究会（講演会）
『絵巻物による日本常民生活絵引』と中世史研究』（仮題）
日時：2006年7月21日（金）18:00～19:30
会場：神奈川大学横浜キャンパス21号館405室
講師：藤原重雄（東京大学史料編纂所）
主催：神奈川大学21世紀COEプログラム
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班

立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム
ジョイントワークショップ
「歴史災害と都市 京都・東京を中心に」

日時：2006年8月26日（土）
13:00～17:00、
27日（日）10:00～16:40
会場：クイーンズタワーA 5階会議室
〒220-6014
横浜市西区みなとみらい2-3-1
（*問合せ：COE支援事務局
045-481-5661（内線3532））



プログラムの詳細、参加方法は本誌
17頁をご覧ください。

図像研究文献目録データベース
図像を読み取り、解析し、生活文化を把握した文献、それに開
する方法を論じた文献を収録したデータベースです。ぜひご活用
ください。

<http://www.himoji.jp/database/>

日本常民文化研究所

Institute for the Study of Japanese Folk Culture

『時国健太郎家文書目録』

神奈川大学日本常民文化研究所が奥能登時国家調査を開始してか
ら20余年、ようやく『時国健太郎家文書目録』を発刊のはこびと
なりました。
今回この目録に収めたのは、膨大な史料のうち近現代・襖下張り
文書をのぞいた、戦国期から近世の史料約8,500点です。

2006年3月発行 A4判 795頁（2冊分）
編集・発行：神奈川大学日本常民文化研究所

歴史民俗資料学研究所

Graduate School of History and Folklore Studies

歴史民俗資料学叢書1

『室町幕府足利義教「御前沙汰」の研究』（鈴木江津子 著）
2006年3月発行 A5判 292頁
編集：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所
発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

外国語学研究所 中国言語文化専攻

The Course of Chinese Language and Culture,
Graduate School of Foreign Languages

神奈川大学人文学研究叢書22

「中国における日本租界 重慶・漢口・杭州・上海」
2006年3月発行 A5判 478頁
編者：神奈川大学人文学研究所（大里浩秋・孫安石 責任編集）
発行所：株式会社 御茶の水書房

各研究所・研究科 問合せ

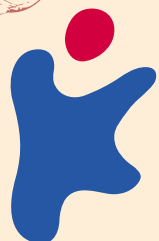
刊行物や催し物については該当する各所にお問合せください。

045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358) 歴史民俗資料学研究所(内線4024)
中国語共同研究室(内線4525) COE支援事務局(内線3532)

非文字資料研究 No.12

発行日 第12号 2006年6月30日発行
編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp/>



調査研究から情報発信へ 4年目を迎え大幅な組織改編 It Is Time for Us to Present Our Results at Large

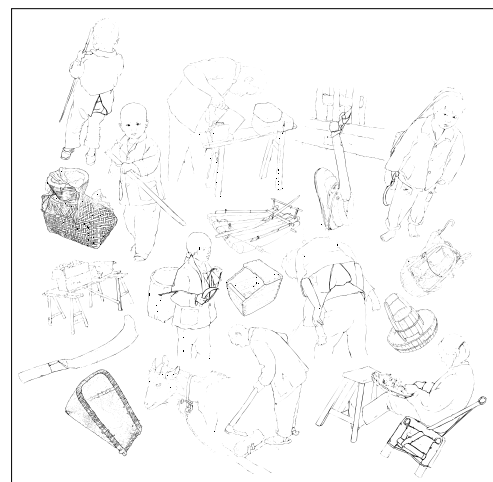
成果の公表、発信にむけて	3
福田 アジオ FUKUTA Ajiо	
2006年度 課題別研究担当者	4
課題別各研究の紹介	6
組織図	11

8月開催 立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム
ジョイントワークショップ
「歴史災害と都市 京都・東京を中心に」
Joint Workshop of Two Universities

災害像の構築にむけて	12
Historical Disasters in Cities and Local Areas in Japan : Toward a Better Grasp of the Big Picture	
北原糸子氏に聞く KITAHARA Itoko	

立命館大学21世紀COEプログラムと ジョイントワークショップ	16
吉越 昭久 YOSHIKOSHI Akihisa	

プログラムスケジュール	17
-------------	----



フィールドでのスケッチから
をのぞく ~ は中華人民共和国江西省万載潭埠郷にて。むら歩きながら
竹がどのように利用されているか目についたものを記録した。
はその一部。おもちゃの刀、カゴ、ヤギの首輪など。は副業が爆竹製造のむ
らでの爆竹づくりの作業から。で使われている竹や木の椅子は中国の家々
では最もよく見る道具のひとつになる。又木を使ってクツを干していた。
は唐楸を砥石で研ぐ。小さな子のズボンはお尻が割れている。道のそばで小
さな子供がしゃがみ、ふっと立ちあがって駆けていくと、そこにかわいいウチ
が残っていたりする。のイカダ船は韓国慶高北道羅北付近の浜で。主にワカメ
の採取に使われていた。(香月 洋一郎)

研究エッセイ ESSAY

租界と居留地に刻印された人間活動の営み	18
The People's Activities throughout the Settlement and the Concession	
孫 安石 SON An Suk	

コラム Column	20
日本における非物質文化遺産についての考察ノート	
宋 俊華 SONG Junhua	

コラム Column	21
私の試みた、つたない「実験」	
刈田 均 KARITA Hitoshi	

海外博物館事情 Foreign Museums

デンマーク デンマークの野外博物館	22
Open-air Museums in Denmark	
丸山 泰明 MARUYAMA Yasuaki	

主な研究活動	24
「景観の時系列的研究」研究会報告	25
写真、絵画資料の著作権について 出版の現場から	
香月 洋一郎 KATSUKI Yoichiro	

コラム Column	26
手のひらが受け継ぐもの	
本田 佳奈 HONDA Kana	

彙報	27
----	----

Information	28
-------------	----

調査研究から情報発信へ 4年目を迎え大幅な組織改編 It Is Time for Us to Present Our Results at Large

成果の公表、発信にむけて

福田 アジオ FUKUTA Ajiо

私たちのプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」もいよいよ4年度目に入った。21世紀COEプログラムは5年間の事業として始められたが、3年目に21世紀COEプログラム委員会の中間評価を受けて、後半の継続可否が判定されることになっている。私たちのプログラムも昨年度にその中間評価を受けた。本プログラムの運営を担当している者は1年間ほぼ完全にそのことに追われたと言って良い。中間評価のための審査用書類作成から始まって、ヒアリングの準備、ヒアリング、現地調査の準備と、多大のエネルギーを費やしたことは間違いなく。幸いにして、中間評価では、後半2年間の事業継続を認められた。ヒアリングや現地調査において委員から様々な問題点の指摘や改善すべき点についての助言があった。そして、最終的には中間評価の4段階のうちの第2段階、一般に言うB評価を貰った。Aの評価でなかったことは非常に残念であったが、とりまとめ役としては取りあえずホッとしたことは事実である。そして、中間評価のヒアリングや現地調査で出された意見、また最終評価書に記載されたコメントに対応すべく、私たちのプログラムの活動内容を点検し、目標達成のための大幅な組織組み替えを含む見直し作業を行い、後半2年間の事業について新たな体制をつくり出した。

私たちは、21世紀COEプログラム委員会による中間評価とは別に、自分たちの判断として外部評価委員を専門研究者に委嘱して、毎年度末に外部評価を実施してきた。現在までに3回外部評価を受けたことになる。外部評価委員は毎回適切であるが厳しい注文を出してくださった。それぞれについて翌年度には改善を施してきた。毎回の外部評価で最も問題になったのは次の2点であった。第1は、私たちのプログラムの4班編制について、具体的な研究活動を行う三つの班と情報発信を行う班との連携が適切になされていないことが指摘された。第2には、調査研究が進められているにも拘わらず、その成果を研究世界で広く共有するためのデータベースの構築・公開が進んでいないことが大きな問題であるとされた。

私たちのプログラムは、申請段階から、5年間の事業を、調査研究をして資料を集積し、解析する前半と獲得した資料を総合し、体系化して情報発信する後半に大きく分けていた。前半部の進捗状況に対して21世紀COEプログラム委員会の中間評価がなされ、体系化への取り組みが弱いという指摘が出されたのは、研究の全体計画から言えば、やむを得ないことであった。私たちが後半に展開しようとしていたことについて、前半の達成内容から不足・不十分を指摘されたのである。この点は、外部評価の指摘においても同様で、前半の調査研究段階に全体的な統合の不足やデータベース構築の遅れを指摘されたのである。それらは後半の重点課題であることは既に計画段階から表明していた。したがって、厳しい指摘に対しては、いずれも後半の事業計画に位置づけられ、間違いなく達成することになっているという回答で終わっても構わないものであった。

しかし、中間評価や外部評価において指摘された多くの問題点は事実であり、前半だから許されるという問題だけではなかったことも明らかである。また、私たちがそれらのことを強く感じていた。そこで、後半の目標達成をより確実にするために大幅な組織改編を行うことにし、一部は昨年秋からそれに移行し、全面的には本年4月から開始した。その組織改編の眼目は、個別課題における調査研究の成果を発信する責任体制の明確化、図像、身体技法、環境・景観の三つの非文字資料を総合し、体系化して発信することを任務とした組織への改組、の二つであった。前者は一見すると研究を個別化するように見え、後者は逆に研究を大きく総合する活動に思え、全く違った方向を目指しているように見えるが、調査研究の成果を確実にものにすると同時に体系化して情報発信するための工夫であった。

私たちの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」は非文字資料すべてを扱い体系化するのではなく、図像、身体技法、環境・景観の三つに絞り、調査研究を経て、総合し、体系化することを計画段階から掲げてきた。それが第1班の図像資料の体系化と情報発信、第2班の身体技法および感性の資料化と体系化、第3班の環境と景観の資料化と体系化である。当初から各班には三つの課題が設定され、調査研究に取り組んできたが、研究担当者や予算執行は班単位であり、課題の追究状況は外部からは必ずしも明確にはうかがわれなかった。そこで今までの調査研究の成果をとりまとめ、総合し、情報発信するための組織として課題を中核に据え、人員と予算執行を課題単位にすることとした。課題の責任の下にデー



タベースの構築、資料の総合を行い、それを基礎に各班は班の当初目標を作り上げることになる。

そして、過去3年間、第4班文化情報発信の新しい技術の開発という名称で、総合化・体系化そして情報発信を担う班を組織し、活動してきたが、中間評価や外部評価での厳しい指摘を受けて、各班・各課題と連携して非文字資料の総合・体系化を進め、情報発信するために新たに三つの班に再編成することにした。すなわち、第4班の地域統合情報発信、第5班の実験展示、第6班の理論総括研究である。いずれの班も、今までの4班の研究担当者を中核に、1班から3班までで活動してきた担当者を加えて編成されている。特定の地域において総合し、体系化した非文字資料を、地域から発信する第4班、展示という方法によって非文字資料を総合し、発信する第5班、そして文字資料をも念頭に置いて理論的に非文字資料を体系化し、情報発信する理論総括研究班である。

これらの組織を示すと以下の通りになる。

第1班 画像資料の体系化と情報発信

1-1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さん刊行

1-2 『日本近世・近代生活絵引』の編さん

1-3 『東アジア生活絵引』の編さん

第2班 身体技法および感性の資料化と体系化

2-1 身体技法の比較研究

2-2 用具と人間の動作の関係の分析

第3班 環境と景観の資料化と体系化

3-1 景観の時系列的な研究

3-2 環境認識とその変遷の研究

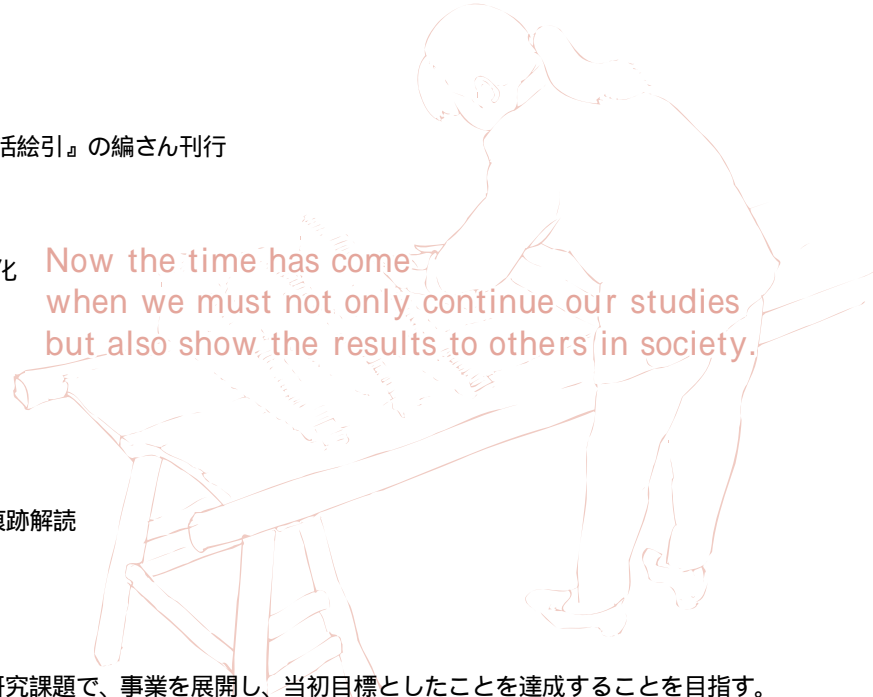
3-3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

第4班 地域統合情報発信

第5班 実験展示

第6班 理論総括研究

以上により、本年からは、六つの班、八つの研究課題で、事業を展開し、当初目標としたことを達成することを目指す。いよいよ、プログラムの成果が目に見える形で発信されることになる。大学内外の関係者、また非文字資料に関心を有する研究者の皆さんには、私どもが発信する情報に注目していただくと共に、情報発信の内容や方法について積極的に注文していただきたい。私どものプログラムは5年間で終わるべきものでなく、神奈川大学を拠点に今後も引き続き活動していく意義が十分にあるものと信じており、皆さんの注文や要求が生かされる機会は今後より大きくなるものと予想するからである。



2006年度 課題別研究担当者（事業推進担当者・COE教員・共同研究員）

・課題代表者（印） ・2006年4月現在

Table with 3 columns: Class Name, Name, and Affiliation/Position. Lists staff for classes 1 through 6.

Table for Class 2: Body Techniques and Sensitivity. Lists staff for 2-1 and 2-2.

Table for Class 3: Environment and Landscape. Lists staff for 3-1 and 3-2.

Table for Class 3: Environment and Landscape. Lists staff for 3-3.

Table for Class 4: Regional Integration Information. Lists staff for regional integration information.

Table for Class 5: Experiment Display. Lists staff for experiment display.

Table for Class 6: Theory Summary Research. Lists staff for theory summary research.

研究会担当委員会 (Research Committee) members: 大里 浩秋, 田島 佳也, 前田 禎彦

ホームページ委員会 (Homepage Committee) members: 佐野 賢治, 木下 宏揚, 能登 正人, 孫 安石

編集・出版委員会 (Editing/Publishing Committee) members: 香月 洋一郎, 橋川 俊忠, 中村 ひろ子, 富井 正憲, 田上 繁

国際シンポジウム実施委員会 (International Symposium Implementation Committee) members: 大里 浩秋, 河野 通明, 田上 繁, 的場 昭弘, 北原 系子, 金 貞我

COE研究員 (PD) (COE Researcher (PD)) members: 榎村 賢二, 國弘 暁子, 本田 佳奈, 丸山 泰明

COE研究員 (RA) (COE Researcher (RA)) members: 王 京, 土田 拓, 彭 偉文, 劉 湯水, フレデリック・ルシーニユ

1-1 マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活絵引』の編さん刊行 前田 禎彦 MAEDA Yoshihiko

1班では、澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、『常民生活絵引』)のマルチ言語版の編さん刊行を目指して鋭意作業を進めています。対象は全5巻ある『常民生活絵引』のうち第一巻から第三巻までの3冊で、本文解説の英語訳と図に付されたキャプションの英語訳・中国語訳・韓国語訳・フランス語訳を作成しています。マルチ言語版『常民生活絵引』の編さん刊行によって、澁澤敬三を中心に日本常民文化研究所がうみだした、世界に類を見ない「絵引」(澁澤は「字引」と対比して、こう呼びました)の試みと成果を世界へと発信し、その共有財産とすることがわれわれの目標です。

翻訳は、おもに日本文化研究にたずさわる、それぞれの言語を母国語とする若手研究者の協力をあおいで進められています。現在、第二巻の翻訳はすでに終え、第一巻の翻訳も順調に進んでいます。まもなく第三巻の翻訳に取りかかるところです。

翻訳に目的のついた今、もっとも腐心しているのは翻訳の校閲作業です。図・本文解説・キャプションにおけるまったく日本に独特なコトやモノとその表現をどのように解釈し、自然で分かりやすい言語に移し替えてゆくのか。参照できる資料は思った以上にとぼしく、校閲にあたっては試行錯誤のくりかえしです。ここで確定した訳語が、今後、世界におけるひとつの基準となるわけですから、その責任は重大です。

マルチ言語版『常民生活絵引』刊行のあかつきには、世界における日本文化研究の発展に寄与するだけでなく、世界の図像研究に新しい視野と潮流をもたらすことを願ってやみません。

1-2 『日本近世・近代生活絵引』の編さん 田島 佳也 TAJIMA Yoshiya

中世の絵巻物の研究成果、『絵巻物による日本常民生活絵引』(『絵引』と略。日本常民文化研究所編)に倣い、その近世と近代編を作るのが1班の役割である。ただ、これまでの検討会と試行錯誤を通じて、近代編を作ることは時間的にも専門スタッフの面からも困難であり、そこで近世編の作成に焦点を絞ることにした。

1 絵引作成の手順

(1) 近世の北海道編と奄美・沖縄編

近世編では北海道編と奄美・沖縄編、本州編の三部作成とした。とくに前者に関しては、民族や差別などの諸問題ゆえに、『絵引』作成上、表記や表現、説明などにおいて乗り越えなければならない困難な問題があり、慎重な取り組みが必要なことから、まず試作本を作って大方の批判を受け、その後、再検討と再構成、完成を期すこととした。

(2) 本州編

本州編では、「江戸名所図会」と、金沢城下とその近郊農村を描いた「農業図会」に絞り、『絵引』作成をする。その際、作成趣旨から、できるだけ庶民生活が生き生きと描かれた情景の分析に力点をいれて解析することにした。これも(1)同様、試作本を作ることから始めるが、それは「江戸名所図会」も「農業図会」もすでに公刊・周知されており、分析対象としては便宜であること、またそうであるがゆえに、試作本の段階で大方の批判を傾聴し、より精度の高い絵引の完成を目指しやすいためであり、作業に取り掛かっている。

2 絵引作成の諸問題

ただ、『絵引』作成には大きな問題が立ちはだかっている。(1)ひとつは対象とする屏風絵などの著作権問題から、市販本掲載画像の分析をすることにしたが、分析対象画像によっては掲載図が小さく、詳細に看取できないことである。(2)『絵引』作成には対象画像の時代を専門とする、多岐にわたる分野の専門家の英知を集め、解析する必要があるが、そうした編成が予算上の問題か、実現できないことである。近年、黒田日出男氏らの研究や東大史料編纂所や歴史民俗博物館などによる画像分析が盛んである。そこでは多岐分野の英知を集め、解析を試みている。それほど、画像の解析は一筋縄ではいかないということの証明でもあるが、本学COEでは学部本務の傍ら、2~3人に『絵引』作成が要求されている。今年度から協力者1人の追加が認められたが、専門家の少ないなかで『絵引』作成がどの程度までできるのかが問われている。

1-3 『東アジア生活絵引』の編さん 鈴木 陽一 SUZUKI Yoichi**1 概要**

- 「姑蘇繁華図」及び朝鮮風俗に関する図像の分析と絵引き作り
- 「姑蘇繁華図」及び朝鮮風俗に関する図像のレファランスとする図像資料の入手、分析、データ処理
- 「姑蘇繁華図」及び朝鮮風俗に関する図像のレファランスとする文字資料の解説とデータ処理
- 成果のデジタルデータ化と一部の公開

2 具体的活動

- 定期的研究会の開催
- レファランスデータ収集のための調査旅行(北京・故宮、台北・故宮、ソウル)
- 外部講師を招聘しての勉強会
- 「姑蘇繁華図」の風景と実景との比較調査、及び蘇州風俗調査

3 レファランスとして活用する予定のデータ

- 図像類
 - 康熙、乾隆期の「南巡図」、清末の雑誌、新聞の挿絵(『點石齋畫報』、『營業寫真』)、清末の絵葉書、土産用絵画、朝鮮半島における風俗図と関連資料
- 文字類
 - 古典:『清俗紀聞』、『清嘉録』など、中国及び朝鮮の近世風俗に関するもの
 - 現代文:観光案内、風俗資料など

2-1 身体技法の比較研究 廣田 律子 HIROTA Ritsuko

第2班の研究課題である「身体技法および感性の資料化と体系化」では、平成17年度は、身体技法の領域で、川田が生業活動における身体技法を、用いられる道具との関係で、モンゴルとフランスで現地調査した。これに対し山口、夏、廣田は、人々の被災招福といった意図が色濃く反映される、狭義の実用を離れた儀礼、祭祀、舞踊における身体技法を、中国と日本について調査し、モーションキャプチャなどの方法により記録を行なった。中でも山口は人形を通して、日中の裃に関わる身体技法の研究を進めている。夏は中国ナシ族の寿寿儀礼における宗教者の動きについて調査研究を進めている。廣田はモーションキャプチャで得た日中の民俗芸能および伝統芸能のデータを分析することで、芸能研究の新たな研究方法を見出そうとしている。感性の領域については、川田は前年度に引き続きとくに嗅覚と香水の面で、フランスでの調査で研究を前進させることができた。

その成果の一部は、11月の国際シンポジウム「非文字資料とは何か 人類文化の記憶と記録」やその他の学会(中国江西国際儼文化学術討論会、お茶の水女子大学比較日本学研究中心第7回国際日本学シンポジウムセッション、高麗大学 民族文化研究院 国際学術大会 18世紀東アジアの公演文化)等の場において示し、また平成17年度の『年報』をはじめとした報告書にそれぞれ発表した。

今後は収集した資料の整理分析を進め、研究成果の公開に向けて多面的な利用に資するように力を注いでいきたい。当面川田は、『年報』3号に、「感性の人類学のための予備的覚え書き」で提出した新しい構想を、事例研究によって具体化して随時発表する見通しである。山口は、今後の課題として、裃とその対象・方法 人形祭祀の歴史と現況 オニ・クグツ・サルガクの語源問題 鐘馗・金太郎・桃太郎の形成、などを追及してゆく見通しである。夏は、引き続きナシ族の宗教者の動きについて分析を行ない、廣田は、跳躍回転の動きに注目しながら、中国の儼舞と日本の花祭りとの能の演者の動きに関する分析結果を公開するための方法を模索する見通しである。

2-2 用具と人間の動作の関係の分析

河野 通明 KONO Michiaki

用具や道具・民具とよばれるモノ資料は、本来の機能に関する情報以外にその地域の歴史・民俗情報をゆたかにもっている。この点で「非文字資料」として注目されるわけであり、この非文字情報を引き出すには広域の比較調査が必須となる。そこで2003～4年には東北6県を調査し、2005年は中部地方調査を始めたが、まだ未調査地域を残したまま、残り2年の整理の段階に入った。そこで若干の補足調査をしつつ、1981年以来つづけてきた西日本の調査成果をも援用して、民具という非文字資料の人類文化研究のための有効性の検出と方法論の確立を目指したい。

民具の非文字資料としての有効性については、過去の西日本調査からは7世紀の大化改新政府による中国系長床犁導入政策を復原できており、COEの東北地方・中部地方調査からは、東北地方には5世紀の伝来期に馬鍬は伝わっていなかったこと、その後7～9世紀の城柵建設にともなう柵戸として中部・関東地方農民の入植にともなって、中部・関東系の板鉤引手馬鍬が持ち込まれたらしいことなどが見えてきている。視野をアジアに広げると、昨年国際シンポジウムでは、雲南大学の尹紹亭氏は在来犁の形態比較から中国における民族移動を復原しており、これを受けて本年10.28(土) 29(日)の第2回国際シンポジウムでは、「犁の形態比較から東アジアの民族移動をさぐる」というテーマを設定して、過去2000余年の東アジアの民族移動の復原に取り組むこととした。

このように20世紀の民具から2000余年もの過去にさかのぼることが可能なのは、民具は壊れて個体は更新されながらも形は変わらず継承されるという性質にある。ただこれにも消費生活用具に比べて生産用具は変わりにくいなどの法則性が看取され、その検出と体系化にもとづく「民具からの歴史学」の方法論の確立が、この部門での「人類文化研究のための非文字資料の体系化」になろう。それを2班共同の報告書にまとめることとしたい。

また人間の動作との関係では、木摺臼の作業姿勢から、朝鮮半島で立位だったものが日本伝来後、畿内で座位用に改良され、これが東北北部に伝わると立位に変わり、南部では近世中期以降に腰掛け姿勢があらわれ普及するという興味深い事実が確認できた。これは日本列島の過去の民族的多様性の反映である可能性もあり分析を急いでいる。

3-1 景観の時系列的研究

香月 洋一郎 KATSUKI Yoichiro

今後2年間の作業の軸は、日本常民文化研究所所蔵のいわゆる「澁澤写真」の一般公開にむけての作業と、この写真群の資料としての可能性の模索及びその提示になります。もとより、この写真の所蔵権は同研究所がもっていますが、一般公開の実作業自体は同研究所がイニシアティブをもっておこなうべきで、わたしたち一課題班の立場としては、それについて実行可能で、現段階でベストと思われるプランを作成し研究所に提示し、一部のサンプル例をつくり、その実施にむけて動くところまでになります。研究所が写真を所蔵しているといっても、これにはネガがなく、また澁澤敬三がさまざまにサポートして撮影させた写真とはいえ、そのサポートのありかたは一律ではなく、研究所がどういった性格の権利をもっているのか、どのような形で一般公開が妥当なのか、そうした点から検討していかなければなりません。

また、これまでの三年間、写された写真については、八久保厚志先生を中心としたメンバーが、精力的に追跡調査をおこなってきました。これをひとつの基盤として、前述した二種類の性格の異なる作業を進めていくつもりです。

具体的には、まず報告書を一冊刊行します。これには「澁澤写真」のリスト 全部ではありませんが と、この写真資料の性格についての論考、追跡調査の結果などをおさめます。それから写真資料についての研究会の主催。これは、研究資料としての写真と調査手段としての写真を考える研究レベルのものと、写真の著作権、著作権の実務的な学習会との二面性をもったものになります(本号25ページ参照)

そうした活動が、これからのわたしたちの課題班の柱になります。もとより、これもまだ始まったばかりですから、手直しをしながら動いていくことになるでしょう。

3-2 環境認識とその変遷の研究

香月 洋一郎 KATSUKI Yoichiro

COEの五年間で、当初ふたつの軸となる研究作業を想定、計画し、環境認識という概念について考えていこうとしていました。ここで述べるのは、そのうちのひとつのものになります。(もうひとつの軸となる作業は、調査対象地の災害や、調査スタッフの問題からその進行ははかばかしくありません。そのことについては、また別のところでご報告いたします。)

これから二年間は、鶴見大学の河野真知郎先生とのコラボレーションで、鎌倉に焦点をしばって、考古学と民俗学の立場から環境の変遷とその認識について考えていこうと思います。と、いっても短い期間に古い歴史をもつ地域を対象にしますから、そのテーマや手順はある程度しぼりこんでいます。河野先生は、所蔵されている未整理の諸資料の、整理、分析をとおして鎌倉の環境の変遷についてあらたな問題提起をされる予定で、わたしは中世の武家政治の中心地であったという先入知識をいったん措いて、逆にひとつの地域として、この地の現在の地割図の分析を試みようと思います。そして、そのふたつの作業をすりあわせて、歴史的環境の概念を考える、といった作業を試みてみたいと思っています。さらにこれまで空撮した全国の谷のむら二千コマほどの写真も参考資料としつつこの地域について考えたいと思います。河野先生はこれまで鎌倉について、たいへんユニークで厚みのある業績をあげられてきており、私自身は、民俗の景観伝承論の立場から胸をおかりする、といった形の作業になると思います。

その成果は、まず、年次報告書において提示したいと考えていますが、来年度には、それ以外の形での発表、発信ができないかその試行を考えたいと思っています。そうした発表、発信をふくめて、試行錯誤の度合いの高い作業になるはずで。

3-3 環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解読

北原 糸子 KITAHARA Itoko

本グループは、大きく人間活動に関する研究グループと災害痕跡解読に関するグループに分かれる。それぞれのグループともに、2006年度の研究活動はこれまでの現地調査についての整理、分析を加え、公開に向けたデータベースの構築に重点を置く。以下3グループはともに、「非文字資料」として絵葉書、写真、グラフィック雑誌などをデータベースの素材とするが、これらの資料の有効性、補完関係となる資料との関係などについては、それぞれのデータベースの作成意図、実際の成果などを踏まえた上で、グループ内外で討議を進めることとしたい。

1 人間活動に関する研究グループ

海外神社跡地調査研究(津田、中島、三鬼担当)は初年度以来引き続き文献、資料、絵葉書、写真などの資料に基づき、データベースを作成する。また、旧満州地域神社跡地について不十分であった調査の補充を行う。

日本租界研究(大里、孫担当)は戦前の中国・朝鮮における「日本租界」の形成、発展、消滅の歴史的経緯を明らかにする。昨年度刊行した『中国における日本租界』(御茶ノ水書房)の成果を踏まえ、2006年度はグラフィック雑誌(画報)絵はがき、写真アルバムなどのビジュアルデータと建築物として残っている構造物の図面データがクロスするデータベースの公開を目指す。

2 災害の痕跡解読(北原、金子担当)

『名所江戸百景』の絵図と江戸地震の被害を関連付けるデータベースを構築する。関東大震災の写真を蒐集し、関東地震の被害データと関連付けるデータベースを作成予定。江戸・東京を襲った2大地震のデータベース上の関連付けも行う予定。これらを8月開催する立命館大学とのジョイントワークショップで可能な限り公開の予定。

4 地域統合情報発信

佐野 賢治 SANO Kenji

従来の第4班統合情報発信班は今年度より、地域統合情報発信班・実験展示班・理論総括班に発展的に分かれ、研究成果の公開を図ることになった。地域統合情報発信班は、図像・民具・身体技法・景観資料をそれぞれ対象とした、1班から3班の研究成果、図像データ・ベース、モーションキャプチャ分析、景観の経年変化解析などの情報処理・発信法を福島県只見町の該当資料により組み合わせ、山村に生きる人々の生活の営みを統合・構造的に体系化する。その方法として、高精細ハイビジョンカメラ映像を駆使したデジタル・コンテンツ化に取り組み、インターネット上で情報発信するシステム開発に取り組む。

具体的に、民具を中核にすると、会津地方には著者、年代、対象地が明確な農書として日本最古の『会津農書』（貞享元年1684）が残る。農民に普及させるため絵農書、歌農書も作られた。一方、只見町には、貞享2年（1685）の『会津郡伊北和泉組風俗帳』が残り、当時の年中行事や農作業の様子が記されている。これらの文書史料や図像に加え、その製作技法や使用に伝統が残る農具や野良着を使用し、かつての農法を復元する。

画像は、スーパー・ハイビジョン、高精解析度をともなったデジタル・コンテンツ化により、ズームアップ・ダウン操作で、鳥瞰の構図から微細な観察まで、従来では及びもつかない視角から把える。絵図・地図と実際の風景をクロスさせ、景観の通時的変化を追うことや、農作業における身体の動きの特徴はモーションキャプチャに連動させることで理解を図る。戦後の電源開発、圃場整理事業などによる集落、耕地の景観変化と、それに伴う生産・生活の変容を項目的に入力し、GIS（地理情報システム）なども援用し、相互関係が立体的に理解できるような画面構成を試みる。

約8,000点余の民具はすでに収蔵展示されているが、記録カードを写真付きでデジタル入力し、特徴のある民具についてはその製作や使用の実態を動画画像化、デジタル・コンテンツ化し、拡大縮小も自在に操作できるようにする。パソコン上で、製作者や使用者に質問を書き込み、回答もできる工夫もする。さらに、それぞれの民具の分布、呼称の一般的情報から、研究文献などの検索ができるクリック・ポイントを設け、関係する国内・外の博物館などのリンク先も整える。従来の箱物としての資料館は、実物資料の収蔵と展示、講演会など人の集まる空間としての意味が第一となり、情報の発信と集約という点において家庭や職場にある小さな函、パソコンがインターネット博物館となり、地域を越えて、国内・外を相互に結ぶことによって大きな“博情館”、情報発信システムとなることを目標に活動していく。

5 実験展示

中村 ひろ子 NAKAMURA Hiroko

実験展示班は研究成果を次の二つの形で情報発信することを担い、今年度新たに編成された。

1 実験展示

図像・身体技法・環境の各資料を活用し、研究成果を統合して展示という形で発信するために、展示テーマとして「身体の記憶 非文字の世界」（仮称）を選んだ。私たちの日常的な行為の多様性を環境との関連で把握し、歴史的展開の中に位置づける試みである。

2007年秋、展示空間となる本学の常民参考室に非文字資料のもつ豊かな世界が広がり、新たな発見に出会える場となるとともに、視覚障害をはじめとする展示にかかわるさまざまなバリアを越える場となることを目指して、展示の企画から設計、実施、展示評価などの各過程に研究者、博物館の学芸員、展示制作の専門家、市民、学生、そして障害をもつ方々といった多くの方々の参加をえて、ともに展示を作り上げていきたいと思っている。

2 高度専門職学芸員養成方法の開発

図像・身体技法・環境資料をはじめとする非文字資料の調査研究、収集保存の今後の担い手として博物館、学芸員に期待するところは大きい。勿論今博物館、学芸員に求められているものはそれにとどまらずより多様で高い専門性であるが、学芸員養成の現状は必ずしもそれに応じるに十分とはいえないように思う。そこで、高度専門職としての学芸員の養成方法を「大学院における学芸員養成カリキュラム」という具体的な形で発信するために、養成の現状の把握を踏まえ、学芸員の専門性とは何かの論議を多くの方々と積み重ねていきたいと思っている。

国際シンポジウム実施委員会

大里 浩秋 OSATO Hiroaki

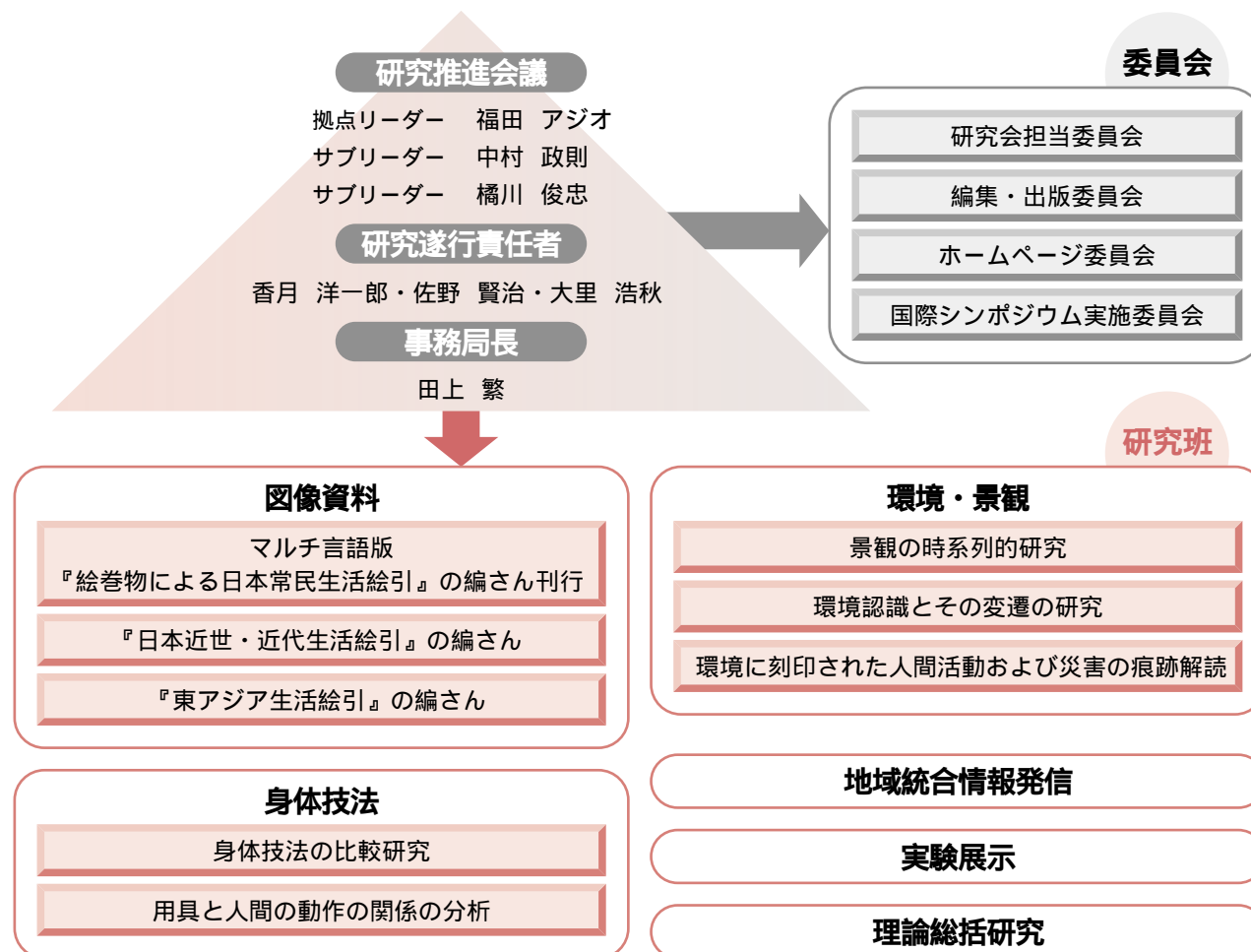
第2回国際シンポジウムの開催に向けて実施委員会が活動を始めたのは、今年1月のことだった。前もって選ばれていた6名、北原系子、金貞我、河野通明、田上繁、的場昭弘、大里浩秋が1月25日に集まり、まず、委員長に大里を選出し、その司会の下、去年の第1回シンポを11月末に開いたことは大学のほかの諸行事と重なって不都合だったことをふまえ、時期を早めて10月28、29日とすることに決めた。

その後、2月16日、3月7日、4月12日、5月10日と会議を持ち、その間に、第2回シンポは、私たち神奈川大学COEのこれまでの研究成果を精一杯報告して、参加者の批評を仰ぐことを基調に据えろとし、テーマの検討や報告者の人選を基本的に終えることができた。

具体的には、「非文字資料から人類文化を読み解く」をテーマとし、2日間を4つのセッションに分け、まず、非文字資料をめぐる方法論についての問題提起を行い、続いて、それぞれ図像、民具、景観写真に焦点を当てて、そこから何が読み取れるのかを明らかにし、それらの報告や討論を踏まえて、最後に、非文字資料を総合・統合的に体系化する方法の共有を目指して、総括討論を行う、というものである。

実施委員会は、今後内容の詰めを行うと共に、多くの参加者を得るための宣伝活動を始めたいと考えている。来年第3回シンポを開くだけの余裕があるかどうかはわからず、そうであれば一層、第2回を成功裏に進める必要がある。研究メンバーは万全の準備をしてシンポに臨んでいただきたいし、大学内外の多くの方の暖かいご支持をいただきたいと切に願っている。

研究組織図





8月26、27日開催 立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム ジョイントワークショップ
「歴史災害と都市 京都・東京を中心に」

災害像の構築にむけて

Historical Disasters in Cities and Local Areas in Japan :
Toward a Better Grasp of the Big Picture

北原糸子氏に聞く

災害絵図を研究素材に

COEのプロジェクトには最初からずっと「災害」ということをテーマに関わられていますが、まず御自身の問題関心からお話していただけますでしょうか。

北原 3年前の2003年からこのCOE（「人類文化研究のための非文字資料の体系化」）が始まっていますが、「非文字」というものをどう解釈するのかについて、私の場合は自分の研究を活用できる範囲で解釈をしました。

わたしの研究領域は災害史研究です。日本の江戸時代・近世から近代のはじめぐらまでを対象としてこれまで研究してきました。この時代の大きな災害に関しては資料が残されています。そのうち文字資料は圧倒的に多いですけれども、絵図の資料もかなりある。文字資料の分類はなかなか大変ですけれども、まず絵図で災害資料の分類をするという仕事を手掛けました。描き手は誰か、何の目的でとか、どこに流布する目的なのかとか。

絵図だと結構わかりやすい。文字以外の資料ということでのお話があったときに、ああこれはもう災害の絵図をやろうと、自分では勝手に思っていて、対象のタイトル「非文字」に関して、自分が独自に領域を打ち立てられればいいんじゃないかと思いました。

初年度は江戸時代を対象にして、すでにそれまで一緒に仕事をしていた原田實さん⁽¹⁾が、『名所江戸百景』は、実は江戸地震との関係があるということを主張をされて、テレビでも一緒に出てお話をしたりしたつながりがありましたので、もうちょっと深めようということで、初年度はその方に共同研究員になっていただきました。それから翌年は時代を近代のほうに延ばして、絵図やかわら版、写真などで災害が流布されていきますので、そういうメディアのいろいろな内容に関して、まだ災害の立場からの研究はありませんでしたので、たとえば版画と写真との間に介在する石版画とか銅版画などの領域で

Compared with woodblock prints, photographs catch things more clearly as they are. However, their realism seems to assimilate our imagination into a fixed style.

何が言われているのかということ、増野恵子さん⁽²⁾という石版画の専門の方を共同研究員にして、一緒に研究をいたしました。

その翌年は、さらに明治の初期から十年代二十年代、まだいろんなものが固まっていない日本の近代国家の政策的な面で、どういうメディア戦略というか、そういうものを発信していたのかということについて、東京文化財研究所に当時はおられた鈴木廣之先生⁽³⁾に共同研究員になっていただいて、今は東京学芸大学の先生になっておられますけれども、以上の三人の共同研究員とともに、三年間を過ごしてきました。お三方の共同研究員が一年一年別でありますので、全体としてのまとめということで、その先生方に加わっていただいてプレシンポを計画いたしました。2005年の終わりごろということになります。

私のCOEにおける関わりとして、発表のあり方とか、共同研究の流れとしては以上のような形になります。

今話された幾種類かの資料は、その資料としての性格の違い、それぞれのアプローチの違いといった点ではいかがでしょうか。

北原 江戸時代、災害が起こりますと、それを描く描き手にはいくつかのタイプがあります。

本当に専門の絵師が描く。それは藩の伝統的な技法を学んだ人が、何かの命令で、いわば今日的に言えば行政的な命令、あるいは藩主の命令で「起きたことを正確に」という形で描く。それは正確に何が起きたかを伝えるという目的があって、藩に残しておくということもあるけれども、幕府にも届ける。届けるのは、一つは小さい藩で災害が起きますと、自力で復興できませんので、資金は江戸以外では外から流れてくる以外はほとんどありえない。したがって、領民から吸い取るという方法と、幕府から借りるといったことがありますね。幕府からの拝借

金は一両とか二両とか、二両がまあ最大限だと思いますけれども。十力年賦で無利子で返すという方式が決まっておりますので、それを獲得するために、何が起きたか報告をしなければならないんですね。そういうための材料として、藩主が命令して絵師に描かせたという災害絵図などが残されております。

そういうものの他に、たとえば藩主が救済をするということがあると、村の名主たち、いわゆる村落行政の責任者に命じて被害の戸数とか、救済の対象となる実際の数値を調べさせるということがあります。何が起こったのかわからないわけですから、たとえば洪水ももちろんですけれども、山が崩れたとか、噴火で土石流が起きてどの辺まで広がったかということとか、あるいは犠牲になった領民が何人いたか、家が倒壊したとか、数値で示すことのほかに、絵を添えるということが多い。そうしますと、それぞれの名主は自分の村の領域だけをやりまですけれども、名主の間でどういう報告を領主に出すかを相談しあうだろうと思います。絵が書き写されて行政担当者間で情報が飛び交うという状況があったことを示す痕跡をたどることができます。

ですから、災害を最初に受けて、純粋に自分の衝撃として自分の日記に描こうとするものもありますけれども、むしろ、量的に残っているのは村落行政など、現代流に言って行政文書の中での災害記録が多い。それから絵図に関しても、いま残されているのは、幕府に収めたとか領主に収めたというものは少なく、その控えとか、自分が子孫のために残すとか、村の人に伝えたいという目的で残すものが、もう一つあります。

それから全く違ったタイプとして、今で言えばメディア、かわら版みたいなものが、だいたい江戸の18世紀の半ばぐらいから残されるようになります。この類の資料が非常にたくさんあって、恐らく都市を中心に売り出されたと思われます。かわら版出版の業者は情報を得ただけで、自分自身は実際に災害場所に行かないで、既成の地図に崩れとか何か、火事で言えば江戸の都市の地図がありますね、それに焼けた範囲を赤くするとかという形で情報を流します。

そういう点で言えば、残されているものの中には類型的なものがある。だけれども、類型化されていく経緯もたどることができるというようなことも言えると思いますので、必ずしも一概に非常に類型的なものが多いとか、



北原 糸子 KITAHARA Itoko
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所
非常勤講師 / 事業推進担当者

あるいは、オリジナルな自分の体験に基づいた非文字が多いとかは一概には言えないと思います。

ただ近代との比較で言えば、これはもう圧倒的に写真の力というものが強いわけで、そういうものをいったん見た人間というのは衝撃を受ける。江戸時代で一つ私自身が不思議に思っているというか、やっぱりこうなんだなあと思っているのは、遺体というものをあまりリアルに書かない。いまも新聞で載せないということがありますけれども、磐梯山噴火というのは明治21(1888)年に起こりましたが、その時期というのは、写真が技術的に進歩していく途中の時代で、写真そのものが地方では非常に珍しかった時代らしくて、写真を撮る人間も写真の力に驚き、見る人間もそれに驚いているという感じの写真が多いので、遺体の写真も比較的多く残されているんですね。

濃尾地震になると圧倒的に少なくなっちゃう。濃尾地震の場合にはかなり早撮り写真師と名乗る写真の有名な専門家が入っていますから、県や官庁から委託されて災害現場に入っているんですね。ですからたぶん自己規制というか、あるいは県のほうからこういうのは撮らないでほしいとか言われるのかわからないけれども、死者7,000人も出た災害としては、遺体の写真がほとんどないというのは不思議です。磐梯山噴火では500人ですからね、死者としては、まあ範囲は狭いかもかもしれませんが、ともかく写真師が遺体を見ていないはずはないのですが、全然それが少ないですね。

リアルさというのは、死体だけの問題ではありません。



関東大震災の発生時刻で止まった時計塔（関東大震災の写真帳から）

別の点でリアルさは写真を通して、この時期珍重されました。災害の研究者が輩出してきますから、地震学者などは実際の現場を撮るといふことにこだわりますので、リアルな地変の写真というものが多く撮られます。これらが多くの場合、焼き増しされ流布します。それが今度は象徴的なものとして何枚も焼き増しされていくわけです。必ずしも写真だからといってリアルという側面ではなく、むしろ、類型化の意味は違いますが、災害とのイメージで言えば、同じものを焼き増して「これがあの災害だ」という形で類型化していく筋道がメディアを通して形成される時代になります。だから江戸時代とは違うけれども、メディアを通して作られる災害認識というものは、そんなにイメージは豊かになるわけでもないんですね。固定化するといふか、何と書いていいか、対象としては広がり、手段としても広がる割には、人間の伝えようとするイメージは固定化されていくといふか、何か逆説的なことが起きているような気がします。関東大震災になると遺体の写真が圧倒的に増えます。ものすごいんです。すぐに禁止されますが、今、東京都の許可を得て、慰霊堂の写真が大学のCOEとして調査させていただいていますが、その写真資料で遺体写真がすごく多いのは、私はたぶん、禁止されたので持っているたいへんだというので震災記念堂に供養の意味を含めて納めたものが多いのではないかなと思うんですね。写真の調査記録をとっている学生たちも、びっくりして、あまりこうしたものに触れていない若い人たちはちょっとへなへなとなっている感じがありますね。

当時は戒厳令下ですから、いろんな意味での強い報道

規制があって、なかなか心落ち着かない。単に遺体の写真が禁止されただけではなくて、これをもっているとどうかなるんじゃないかとか、そういう恐怖感みたいなものがあつたのではないかな、そういう感じがしますね。多くの人があの時に殺されてもいますしね。

都市の災害痕跡を探る

さて次に8月に開くワークショップについてですが、これはプランを拝見しますと、古い歴史をもった都市の災害の問題が主軸のようですね。

北原 こういう形にしないで良かったのですが、とりあえず立命館大学COEは、京都を中心に、防災を含めたいくつかのプログラムが大々的に展開している大学なんです。その共通の課題は、防災と、京都という都市について古代から現代に至るまでを対象に研究を蓄積させていくという方向のようです。

一緒にジョイントワークショップをやろうと考えましたのは、立命館大では都市の歴史災害のデジタル化したデータベースが非常に進んでいますので、それをワークショップの話題とさせていただくことですね。東京は広すぎて一つにまとめるということはないので、関東大震災の研究も、いろんな研究者がいる割にはひとつにまとめるということはないかなさそうなんです。この横浜でやるとすると、テーマとしては関東大震災をやらなければ対応できないんじゃないの、ちょっとまずいんじゃないの、という問題が出てきましたので、関東大震災を扱います。関東大震災は神奈川県域の海岸部には大きな大きな被害をもたらしていますので、必ずしも都市災害ばかりではありません。しかし、とりあえず、京都との比較という意味で、東京に絞りました。東京よりむしろ震災の被害としては、横浜の方が大きいといわれていますが、私自身が研究が進んでいないので、大きく問題を把握できる段階にありません。このワークショップでは、研究のまとまりの悪い東京を対象として、文系も含めて、理学・工学系の人間、その他の分野も含めて、歴史災害の研究をやろうという呼びかけの目的が一つあります。完成された研究を発表するのではなくて、これからこういう方向で研究をしていくと

いろんなことがわかるのではないかとということ、東京の災害史研究をやっている人に呼びかけたいというのが、私の一つの意図です。そのひとつの目標として、共同の場を設定してひとつのまとまりを持った研究を進めている立命館大COEのグループがあるのではないかな、その研究の実績と方法を学ばせていただきたいというのがこのワークショップに賭けるわたしの期待です。

もちろん、これはこちらのほうの非文字のプログラムとして進めさせていただきなければいけませんので、私のほうで問題を投げかけるのは、写真のデータベースをやるということなんですけれども、それだけでは震災の研究はできませんので、すでにいろいろ研究されている東京のほうの関東大震災の研究者に声をかけ、ご協力いただきます。

あとはもう一つ、それだけでは災害の研究は完結しないわけで、現代との関わりで、どんな問題を考えている人がいるのかということも提示したいということがありました。「都市を中心に」ということになっておりますけれども、第三部の「歴史災害と現代」というところは必ずしも都市ということではありません。さまざまな方法で災害研究へのアプローチが行われていることを議論の俎上に載せたいと考えました。神奈川大学からは、香月先生にもご参加いただいております。それは日常生活の中の災害認識ということで、第一部の京都を中心とした立命館の方々のお話と、第二部の関東大震災と社会との関係とは異なる形での研究の成果をご発表いただくという構成になっております。

歴史災害という領域はなかなか研究者が育っていないので、工学系や理学系は別にしますと、歴史学の研究者で災害研究をしているのは非常に少ない。いろんな分野の人と一緒にやらないと進まない研究だという意味でも、これをジョイントワークショップとして問題提起をしたい、ということです。

いずれにせよ、ひとつの対象をいろんな側面から見るということで、全体として捉えられる。ですから方法がごちゃ混ぜになることでもないし、従来の方法を砕けさせることでもなんでもなくて、むしろそれぞれが理解できなかったことを引き取って、より理解が深まるというのが、いろいろな分野の人と一緒にやる災害研究の面白

We can think about disasters from various points of view. They might be imperfect. However, they will be more substantial through our discussion. This is just the first step.

さだと思うんですけども、なかなか一緒にやってみないと通じないのね（笑）

ジョイントワークショップへの期待

それがワークショップの方向性であり本質である、ということになりますか。

北原 ええ。講演会じゃなくて、討論の時間が少し少ないですが、一般の方々にも討論に参加していただきたいと思います。最初の日、立命館大のデジタルのいろんな先進的な方法を提示してもらおうと思いますので、技術的な話はそこで、質疑応答で解決。次の二日目の方は、人間の話が中心になりますが、それを受けて、両方をかき混ぜた討論をワークショップでやりたいと思っていますので、ワークショップとうたったのは、その辺に意図があります。単なる討論会でもないし、それから時間の割り振りで皆さんに適当に意見を言ってもらおうということでもなくて、いったいこれで、こういうデータベースとか、画像の表し方を通して、言いたいことがいえるのかとか、技術的に面白いことだけ、技術的に高度化することだけが目的になっていないかとか、本来目的としたことが、どれだけ実現できているのかということをお聞きしたい。

神奈川大学の私の方は立命館大とは比べ物にならないほどの個人的にマイナーなスケールでやっておりますが、理念としてどういうことを考えているのかということ、先達としての立命館大学からいろいろ教えてもらいながら考えたいということを狙っております。

(注)2005年11月20日開催、第1回国際シンポジウム プレシンポジウムでの成果を踏まえて、各発表者が論点を整理、内容を深めた論文が下記報告書に収録されている。
神奈川大学21世紀COEプログラム シンポジウム報告1 『版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出』

- (1)原信田實 「浮世絵は出来事をどのようにとらえてきたか」
- (2)増野恵子 「見える民族・見えない民族 『輿地誌略』の世界観」
- (3)鈴木廣之 「変貌する明治の図録」

(2006年5月17日 COE共同研究室、聞き手：香月洋一郎 記録：関ひかる・丸山泰明)

立命館大学21世紀COEプログラムと ジョイントワークショップ

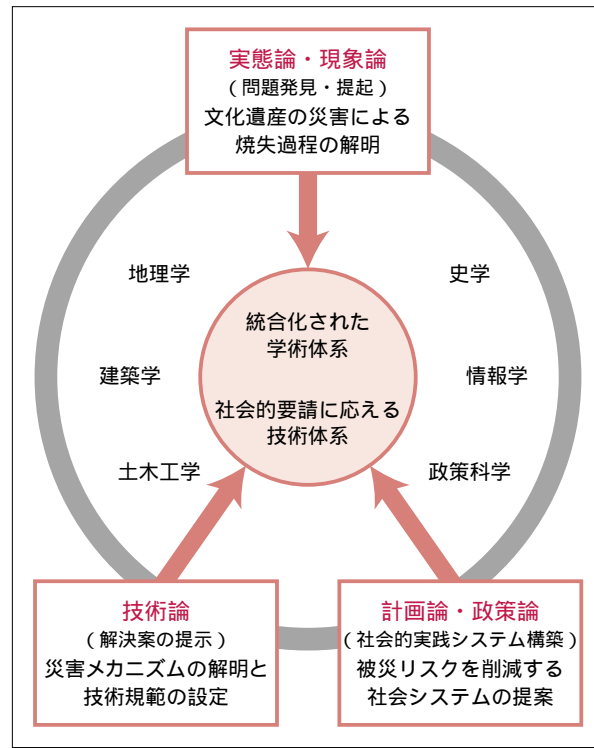
吉越 昭久 YOSHIKOSHI Akihisa
立命館大学文学部人文学科地理学専攻 教授
(21世紀COEプログラム サブリーダー、歴史都市防災研究センター副センター長)
専門：歴史水文学(過去の水文環境や水害などを研究)

1 21世紀COEプログラムの研究

立命館大学では、現在、4つの21世紀COEプログラム(以下、COEという)が研究活動を行っているが、そのうちの1つが平成15年度に「文化遺産を核とした歴史都市の防災研究拠点」というテーマで採択された本COEである。このCOEの狙いは、以下の通りである。これまで文化遺産や防災に関するそれぞれの研究は盛んに行われ、大きな成果をあげてきた。しかし、その両者を組み合わせた研究、つまり文化遺産の防災に関する研究はほとんど手つかずの状態にあった。本COEはここに着目して、京都という歴史都市を主たる対象に研究を進めることにしたのである。

研究の体系は図のように、「実態論・現象論」「技術論」「計画論・政策論」から成るが、研究推進メンバーが特定のテーマの研究を推進するだけでなく、COE内外で研究グループをつくり共同研究を実施することにも大きな特徴がある。また、総合大学のメリットを活かし、土木工学・災害科学・建築学・情報科学・政策科学・歴史学・地理学など文化遺産の防災にかかわる分野の研究者が、文理融合型の学際的な研究を推進していることも大きな特徴といえる。研究推進メンバーは、19名の専任教員と3名の客員教員から成るが、他にPD・RA・客員研究員・研究協力者など約100名がこれに取り組んでいる。京都を主たる研究対象にしているが、研究が散漫なることを防ぐために特定の地域(東山地域など)に焦点を絞ることにした。

既に、3年が経過し、「実態論・現象論」「技術論」に関しては多くの成果があがってきた。それと同時に清水寺から高台寺にいたる地域では、メンバーによる防災計画が国の事業に採用され、今年度から具体的な事業が始まろうとしている。本COEの研究の重点は、今年度と来年



度においてはまとめ的な意味を含む「計画論・政策論」に置かれようとしている。

なお、このCOEをもとにして、平成16年度には工学的な防災システムを研究するハイテクリサーチセンター整備事業に、平成17年度には主に人文・社会科学的な視点から防災にアプローチする学術フロンティア推進事業に採択(共に文部科学省)され、それぞれ「防災システムリサーチセンター」と「歴史都市防災研究センター」を建設して、COE終了後につなげる道をつけた。2つのプロジェクトは、必ずしもCOEとメンバー的には重複してはいないが、それぞれ50名程度がかかわって研究を進めている。

2 神奈川大学とのジョイントワークショップの位置づけ

本COEでは、これまで様々な機関と共同研究を展開してきた。国外ではユネスコなどの国際機関や、主としてアジア地域の大学や政府機関などとの共同研究、シンポジウムなどを開催してきた。国内では、COEで災害・防災研究を行っている大学とシンポジウムを開いたし、本COEの主導で文化遺産の防災にかかわる諸機関で文化遺産防災連絡会議を組織し、平成17年1月には国連防災世界会議においてシンポジウムを開催した。

今回、神奈川大学とのジョイントワークショップは、本COEの中でも歴史学や地理学の分野のメンバーを中心に、「実態論・現象論」に関心をもつメンバーが中心になって開催する。人文・社会科学的な分野での共同研究はこれまでは小規模なものはあったが、本格的なものとしては今回が初の試みとなる。このため、直接関係するメンバーだけでなくCOE全体としても関心を寄せ、成果に期待している。

立命館大学・神奈川大学21世紀COEプログラム ジョイントワークショップ

「歴史災害と都市 京都・東京を中心に」

開催日程 2006年8月26日(土)・27日(日)

開催場所 クイーンズタワーA 5階会議室(〒220-6014 横浜市西区みなとみらい2-3-1)

参加
無料
先着申込
80名
まで

第1日目 8月26日(土)

プログラムスケジュール

第2日目 8月27日(日)

13:00~13:10 開会挨拶
吉越 昭久(立命館大学)
村橋 正武(立命館大学COE拠点リーダー)
福田 アジオ(神奈川大学COE拠点リーダー)
趣旨説明
北原 糸子(神奈川大学)

1部 都市の歴史と災害復元

13:10~13:40 平安京の地形環境と災害
河角 龍典(立命館大学)

13:40~14:10 平安京の祭礼と災害
片平 博文(立命館大学)

14:10~14:40 公家町の火災と防災
冷泉 為人(財・冷泉家時雨亭文庫)

14:40~15:00 休憩

15:00~15:30 近世京都の火災と復興
鈴木 栄樹(京都薬科大学)

15:30~16:00 3次元でみる京都の景観と災害
中谷 友樹(立命館大学)

16:30~17:00 質疑応答

2部 関東大震災と社会

10:00~10:30 関東大震災の写真と地図のデータベース
諸井 孝文(鹿島建設)
北原 糸子(神奈川大学)

10:30~11:00 関東大震災の救済
鈴木 淳(東京大学)

11:00~11:30 関東大震災後の社会
佐藤 健二(東京大学)

11:30~13:00 昼食

3部 歴史災害と現代

13:00~13:30 絵画を活用した防災 三河地震を素材として
林 能成(名古屋大学)
木村 玲欧(名古屋大学)

13:30~14:00 文化財と災害痕跡
桂 雄三(文化庁)

14:00~14:30 日常のなかの災害認識
香月 洋一郎(神奈川大学)

14:30~14:40 休憩

4部 討論(司会:吉越昭久・北原糸子) 14:40~16:40

(プログラムの内容については変更になる場合もございます)

申込方法 ハガキ・FAX・Eメールにて以下の情報を記載の上お申込下さい。
参加希望日 氏名 住所 電話番号 所属機関
記載された個人情報は注意をもって管理し、ジョイントワークショップの円滑な運営のために活用させていただきます。

申込先 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1
神奈川大学COE支援事務局 FAX:045-491-0659 E-mail:himoji-coe@kanagawa-u.ac.jp
*問合せ TEL:045-481-5661(内線3532)

租界と居留地に刻印された人間活動の営み

The People's Activities throughout the Settlement and the Concession

孫 安石 (神奈川県大学大学院外国語学研究科 助教授 / 事業推進担当者)
SON An Suk



1 租界と居留地という異空間

神奈川県大学21世紀COEプログラムの第3班の研究テーマは環境に刻印された人間活動の営みを歴史学、地理学、民俗学の観点から体系化することである。

歴史学・中国近現代史から同研究テーマに加わった筆者は、東アジア近現代史に登場する租界と居留地という都市空間に注目し、なかでも戦前中国・朝鮮において設定された日本租界がどのような歴史的変容を遂げ、形成、発展し、消滅するのか、そのプロセスを解明することを目指している。

筆者が租界と居留地、そして、日本租界に注目するのは次のような理由による。東アジア近代史は欧米諸国との異文化交流史という側面をもっており、それはしばしばウェストン・インパクトという言葉で表現される。その際、異文化交流は例外なく、交流を可能にする時間と場所を必要とするのは言うまでもなからう。この異文化交流の場は、時期によっては異なるが、中国、日本、朝鮮には租界、または居留地という形で存在していた。例えば、中国の上海、日本の横浜、神戸、朝鮮の仁川などは広くその例として知られている。ところがアジア各地に設定された欧米の租界や居留地の他に、戦前の日本が中国・朝鮮に日本の専管租界を設定していたことは多くの人々の記憶から忘却されつつある。

戦前の日本の近現代史を「戦争」という側面から捉えなおせば、その歴史は、とくにアジア近隣諸国に向けた対外膨張とそれに伴う摩擦の歴史であり、その最たる不幸が現在までアジアの歴史問題として根を残す台湾と朝鮮の植民地化、そして日中戦争と太平洋戦争へと繋がる一連の出来事であることに異議を挟む人は少ないだろう。

その中でも中国における日本租界は、日清戦争から1945年までのあいだほぼ半世紀に渡って日本の特殊権益が確保された異空間として実在しており、日本と中国は租界の利権をめぐる絶えず衝突し、その人間活動の営みは両国の近現代史は勿論、環境や景観に様々な形で刻印されているといえる。

2 中国における日本租界と都市景観

日本は日清戦争の勝利をきっかけに、中国各地において欧米列強と同等の法的、経済的な利権と特権が保障される租界の設定を中国側に要求した。

日本側の論理は、中国の開港場各地に日本租界という区域を設定し、そこに新たな町をつくり、在留邦人が各種の商業活動と工業生産を展開し、政府の出先機関である領事館が在留邦人の生命と財産を守る、というものであった。この論理と真正面から衝突するのが中国側の論理であったことは言うまでもないが、租界の建設に関する全権が日本側に委ねられた以上、租界は日本の主導によって開発される。

例えば、中国の内陸部の中心に位置する漢口の日本租界は、「漢口日本居留地取極書」(1899年)によって租界が設定され、1906年の「漢口日本商業者組合規則」により商業活動の奨励が図られた⁽¹⁾。1908年には日本租界のさらなる拡大が決まり、1911年には漢口領事館の新築工事が始まり、1918年には東京建物株式会社によって租界の埋立てと都市のインフラ建設(低地の埋立てと町並みの整備、港湾の土木工事など)が始まる。さらに、1927年には北伐という中国国内の軍事衝突を経て、日中戦争時期には、一時期租界が閉鎖される紆余曲折を経て、戦後、最終的には中国側に回収される過程を辿る。

富井正憲は「漢口日本租界の都市空間史」という論稿の中で、1930年までに整えられた日本租界の都市空間の構成が、その後大きな用途の変容や一部の建物の建替えが行われたにも係らず、2006年の現在にまで基本的には継承され、道路パターンも街区形状も建設時そのままであることを指摘している。この二つの区画地図を比較すれば、戦前の日本租界時期に着手された都市の景観配置が、1960年代の文化大革命時期と1980年代の改革開放時期を経て、現在にまで継承されていることがよくわかる。⁽²⁾

3 租界の産業遺跡と生活の営み

このような都市景観の比較検討が、従来の政治史や経

済史に重点を置いた歴史研究とは異なる有意義な作業仮説を提示してくれることは言うまでもないが、租界における人間活動の営みというより具体的な分析をすることが課題としては依然として残る。

ここで筆者が大きな示唆を得た本が、戦前中国で出版された周世勳編・朱順麟撮影『上海市大観』(上海、文華美術図書公司、1933年)である。⁽³⁾同書は、租界を含む上海市全体を、交通(鉄道、路面電車、船舶、バス、タクシー)商業(百貨店、レストラン、茶館、化粧品売り場、お菓子屋)娯楽(ホテル、ダンス・ホール、映画館、競馬場)などに分け関連施設の写真を掲載するほか、各営業品目の内容にまでふれている。

筆者は、同書の斬新な構成を現在のCOEプログラムに応用できる可能性として「産業遺跡」の存在に注目している。人間活動の営みは個人や国家というレベルで自分史や一国史として集約されるほか、各種の産業部門にも蓄積され、その資料が「社史」として文字化される他、工場や設備などが産業遺跡、または景観として現存する場合が多く、今後の歴史研究においてさまざまに応用できるのではないかと考えられるからである。

中国でもこれらの産業遺跡が注目され、薛順生他編『老上海工業旧跡遺跡』(上海、同济大学出版社、2004年)は、都市上海の発展を支えた租界の公共事業(ガス、水道、電気等)と紡績、製薬、煙草、造船、印刷業などの代表的な産業建築が戦前から戦後をへて、いま現在、どのように継承されているのかについて述べている。

租界の産業遺跡という視点を歴史学分野でどのように非文字資料研究と組み合わせながら体系化するのは、今後の課題であるが、ここでは紡績産業を取り上げる場

合の作業仮説を紹介し、どのような成果が期待されるのかについてふれる。

例えば、戦前の上海は日本の労働集約型の「在華紡」(第一次大戦以降、中国各地に設立された紡績工場の総称)の一大拠点であったが、前掲の薛順生『老上海工業旧跡遺跡』が1921年に大阪の東洋紡績株式会社の上海工場として始まった「裕豊紡績株式会社」の沿革についてふれている。

それによれば、同工場は1921年の操業開始以降、1936年には「裕豊紡績株式会社」に名称を代え、1946年には中国紡績建設公司第十七棉紡績廠として運営され、1949年の中華人民共和国成立後には上海第十七棉紡績廠に改称された。また、1966年の文化大革命期間中には工場は労働者の革命基地と化し操業がほぼ停止したが、1980年代から工場の管理体制が整えられ、1981年には企業管理部門の優秀賞を獲得し、1992年には「龍興株式会社」として新たな出発を始めたという。

この概要説明を眺めるだけで、この紡績工場の歴史そのものが日中関係史や中国近現代史と深い関連があることは容易に推測できる。この紡績工場だけではなく、上海にはいま現在にも多くの在華紡の産業遺跡が現存しており、筆者は其中で、内外綿、豊田紡績、上海紡績株式会社、公大紗廠などの工場跡地を直接見学する機会に恵まれた。これらの紡績会社は、多くの場合会社の「社史」を残しており、例えば『内外綿株式会社 五十年史』は豊富な関連資料を残している。また、『駕長風』(上海紡績株式会社、1933年)は、工場内部の作業写真は勿論、社員の家族写真までも掲載している。⁽⁴⁾

これら紡績会社関連の資料を組み合わせ、戦前の在華紡の経済的な側面は勿論、工場の歴史的な変遷や工場跡地の周辺が現在どのような環境と景観として残り、再開されているのかなど、人間活動の営みの一端を産業という分野から体系化するきっかけを掴むことができるのではなからうか。まだ多くの課題はあるものの、中国における租界と産業遺跡に関連する資料が整理でき次第、データベースとして公開していきたい。

注

- (1)(2) 大里浩秋・孫安石編『中国における日本租界』(御茶の水書房、2006年)所収の論文を参照。
- (3) 周世勳編・朱順麟撮影『上海市大観』(上海、文華美術図書公司、1933年)は、愛知大学・三好章教授の紹介で霞山文庫所蔵本を用いることができた。
- (4) 『駕長風』(上海紡績株式会社、1933年)は甫喜山精次さんから提供していただいた。



図1 薛順生他編『老上海工業旧跡遺跡』(上海、同济大学出版社、2004年)



コラム

Column

日本における非物質文化遺産についての考察ノート

宋 俊華 (中国 中山大学非物質文化遺産研究センター 助教授) SONG Junhua

今世紀のはじめ、ユネスコは非物質文化(無形の文化)を人類共通の遺産としてとらえ、保護していくことを提唱し、2001年5月に「第1回人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」を公表した。続いて2003年に第2回の傑作宣言を公表し、合わせて第32回総会で「無形文化遺産の保護に関する条約(無形遺産条約)」を採択した。非物質文化遺産に対する調査、研究、申請と保護は、世界規模の流れとなりつつある。

「知識認識論の視角からいえば、国際社会の『非物質文化遺産』に対する注目は、多少なりとも、日本における『無形文化財』という概念の影響を受けている」という指摘がなされているが、すると日本において「無形文化財」という概念はどのように生まれたのか、そして理論と実践の両面でどのような傾聴すべき経験をもつのか、これは我々が非物質文化遺産を研究するとき、解決すべき問題の一つであろう。

筆者が勤務する中山大学・中国非物質文化遺産研究センターは、教育部と広東省の人文・社会科学重点研究拠点であり、主な仕事は中国国内における非物質文化遺産についての調査、研究と保護である。筆者が責任者を務める「非物質文化遺産の理論と実践についての研究」は同拠点のプロジェクトの一つであり、研究は日本における「無形文化財」の理論及び実践にも及んでいる。

今年の2月、筆者は光栄にも神奈川大学21世紀COEプログラムの訪問研究員として招かれ、日本における非物質文化遺産の理論及び実践について現地調査を行うことができ、多くの収穫を得た。

2週間の日本滞在中、筆者は鈴木陽一教授の指導のもとで、神奈川大学COEプログラム拠点(日本常民文化研究所、大学院歴史民俗資料学研究所、同外国語学研究所中国言語文化専攻) 東京大学東洋文化研究所、早稲田大学坪内逍遙記念演劇博物館、首都大学東京中国語学科、名城大学民俗学研究所、国立歴史民俗博物館、国立劇場、伝統芸能情報館及び東京・横浜市内の資料館や神社などを訪れた。神奈川大学の山火正則学長、中島三千男副学長、福田アジオ拠点リーダーをはじめ、橘川俊忠、佐野賢治、山口建治、及び東京大学の木村康、首都大学東京の佐々木睦、何彬など非物質文化遺産学、民俗学及びその他関連学科の研究者、専門家の方々とお会いして意見交換する事ができ、また日本の神楽や寄席などの伝統芸

能を体験することもできた。

今回の訪問研究で、筆者は非物質文化遺産の理論に関する多くの資料を収集することができた。とくに日本における「無形文化財」の理論と実践については新たな認識を獲得し、それによって日本文化に対する理解が深まり、「非物質文化遺産の理論と実践」という研究課題の深化のための、理論的・資料的基礎が得られた。

筆者にとって、神奈川大学COEプログラムが提唱している「人類文化研究のための非文字資料の体系化」という発想は非常に刺激的なものであった。中国における非物質文化遺産の研究、とりわけ伝統演劇の研究のために、多くのヒントを与えてくれた。これまでの古代演劇遺産についての研究は、文字資料から出発し、台本や文献の実証研究を重んじており、関連する非文字資料については重視してこなかった。しかし、体の動き方、音楽と唄い方、服飾と道具、そして舞台建築などは、演劇研究にとって大変重要である。演劇の本質は文字資料の中ではなく、むしろ非文字である「演じられている過程」にあると言っても過言ではない。人類の文化遺産の中の非文字資料を研究し、さらにそれらを体系化する試みは、演劇遺産の研究にとって革命的なことで、非物質文化遺産のその他の分野に与えるであろう影響も計り知れないものがあるだろう。

今回の訪問研究は、申請、出発、訪問考察から帰国まですべて順調であった。これはひとえに神奈川大学及びCOEプログラムの行き届いたサポートと手配のお陰である。最後に、お邪魔した全ての研究者、専門家のご理解とご支持、そして指導教官である鈴木教授、チューターである王京研究員、COE支援事務室のスタッフ全員の心温かいご協力と手助けに、心より感謝の意を表したい。(宋俊華氏は、2006年2月22日~3月7日訪問研究員として来日。)

翻訳:王京(COE研究員・RA)
宋先生は伝統演劇の専門家、その学位論文「中国古代演劇服飾の研究」が教育部「全国優秀博士論文」に選ばれている。いまの関心は伝統芸能をはじめとする無形文化財の保護で、立法と実践の両面において「中国スタイル」を醸し出そうとしている。日本の経験は大いに参考になるよと、連日ハードな日程を終えて、先生は何かをつかんだように微笑んでいた。

コラム

Column

私の試みた、つたない「実験」

刈田 均 (横浜市歴史博物館 学芸員/共同研究員) KARITA Hitoshi

現在博物館の現場にいるからか、今回COEの実験展示の共同研究員に関らせていただくことになった。横浜市歴史博物館の準備室に勤務してから15年、博物館という場で行われるさまざまな活動に従事してきた。そのひとつである企画展には計8回ほど関わった。それぞれの企画展は、テーマやコンセプトはもちろん予算規模や条件も異なるため、毎回毎回が自分にとっての「実験」であった。ここでは自分が関わった企画展のなかで試みた、つたない「実験」のいくつかを記してみたい。

初めての企画展を担当したのは博物館が開館した翌年、1996年春である。博物館が立地する横浜市都筑区「港北ニュータウン」のかつてのくらしの様子を紹介することが主題であった。いわゆる民具や生活用品の展示では、国立民族学博物館のように同種の資料を圧倒的な量で示しモノが自來館者に情報を語りはじめるような展示手法と、江東区立深川江戸資料館のようにそのモノが使われた状況を再現して来館者が空間的に当時を疑似体験できる展示手法、いわゆる生活再現展示が企画展でも有効な方法であると自分では考えてきた。このときは後者を試み、企画展示室内に開発以前の農家の一角を実物大で再現した。来館者の反応は良好で、生活再現展示が資料の持つ情報を見る側に伝えたり理解を促す有効な手段であることを実際に確認でき、この時から疑似体験できる空間をポイントに置いて展示を構成するようになった。

2回目・3回目の企画展示を進めていく中で、展示に伴う出版物について考えることがあった。博物館では、企画展と同時に図録が出版されることが多い。期間が限定される企画展では、会期終了と同時に展示空間が失われ、展示資料が再び集まる機会はずれない。展示資料を集成して解説を加えた図録は大切な企画展の記録となる。ところが、図録はあくまでも二次元で構成される印刷物であり、情報は掲載された資料写真と図版、文字情報を用いて発信される。展示空間で実物資料を中心に三次元で発信されていた情報とは種類も内容も異なってくる。すると、展示を見ていない人にとっての図録は、解説付きの資料集にしかすぎなくなることすらある。そこで自分は、企画展終了後も一般の人に展示の意図を伝えられる印刷物が必要ではないかと考えた。平易で十分な量の文章と資料写真や図版を掲載し、三次元の展示を見ていない人にも印刷物という二次元の世界で意図をクリアに

伝えられるものである。たとえすべての資料が掲載されてなくても、展示の意図が明らかに表現されていれば、記録の役割も果たすことができる。自分の中ではこれを図録とは言えないため、関連出版物と名付けることにした。99年以降は展示の内容に応じて図録と関連出版物のどちらが有効かを考え、制作するようになった。

2002年の秋に初めての特別展を担当することになった。神奈川大学日本常民文化研究所と共同で開催した「屋根裏の博物館 実業家澁澤敬三が育てた民の学問」という展示である。展示は神奈川大学が継承している日本常民文化研究所を設立した実業家、澁澤敬三の学問的な業績をたどることを目的とし、敬三の活動を時系列的な流れに基づいて構成する計画であった。この時、どのように展示内容を伝えるが問題となった。展示は実物資料を中心に映像や解説文などさまざまな情報によって構成されるが、解説文は一般に200字程度が適当と考えられている。展示空間で長い解説文を用いると、実物資料が発信する多様な情報をスポイルしたり、見る側に過度の疲労を与えたといったデメリットがあるためである。けれども、配置される実物資料や図版、画像資料を時系列に沿って伝記的に説明していくには、どうしても長い文章が必要となった。悩んだあげく選択したのは、定説に逆らい、展示空間に長い解説文を用いる試みであった。当然読んでもらえなければ展示の目的は達せられない。理解しやすく疲れない文章、とりあえず読んでもらえる文章を目標にし、主人公である澁澤敬三を語る三人称として「敬三さん」という親しみやすい言葉を用いるなど、子どもに澁澤敬三の伝記を伝えるつもりで作文に取り組んだ。このときの展示空間に配置した解説文(キャプションは除く)は合計16,231文字、原稿用紙約40枚余りとなった。展示の入館者数は目標には届かなかったが、解説文の「敬三さん」という言葉使いが好評で、長い文章にもかかわらずすべてを読んでくれた来館者が結構いたことが印象に残っている。

ずらずらと記してしまったが、これまで自分が経験した企画展で試みたつたないいくつかの実験とその自己評価である。今回どのような「実験」に取り組むのかはまだわからないが、この与えられた機会をぜひ活用させていただきたいと考えている。

宋 俊華



デンマークの野外博物館 Open-air Museums in Denmark

丸山 泰明 (COE研究員・PD)
MARUYAMA Yasuaki

2005年の12月、一週間ほどの短い期間だったが、デンマークとスウェーデンを旅してきた。今回はデンマークで訪れた民俗についての二つの野外博物館、フリーランドムセー(Frilandsmuseet)とフューネン村(Den Fynske Landsby)について紹介することにしたい。

フリーランドムセーにて

デンマークはユトランド半島と大小の島々からなる北海道の半分ほどの広さの国土に、北海道と同じぐらいの国民が住んでいる国である。その首都コペンハーゲンの中心部から電車で30分ほどの郊外にフリーランドムセーはある。86エーカーもある敷地には1650年から1950年ぐらいまでの約50軒ほどの民家が各地方から移築され、多くの民家は内部の生活道具なども再現されている。家だけでなく、周囲の景観も再現され、実際に昔の服装をした人々が農作業をしたりして働き、来館者たちに解説し、質問にも答えてくれる。牛や羊などの家畜も飼われている「生きている博物館」である。ベルナルド・オルセン(1836~1922年)が1897年に小規模の野外博物館を設立し、1901年に現在の農科大学の跡地へと移転、1920年に国立の施設となった。設立の背景には、国民国家の時代におけるナショナリズムの高揚がある。1864年、デンマークは第二次シュレスヴィヒ戦争でドイツにシュレスヴィヒ地方を奪われた(第一次世界大戦後、ドイツから北部シュレスヴィヒを再び割譲)国土を大きく失ったデンマークは外で失ったものを内で取り返すために国内の開拓・産業振興を進めていくが、フリーランドムセーもこのような時代の影響を強く受けている。愛国心が強く、第二次シュレスヴィヒ戦争にデンマーク軍の士官として従軍もしていたオルセンは、フリーランドムセーに現在はドイツ領になっているシュレスヴィヒ地方の民家を移築し、また17世紀にスウェーデンとの戦争で失った南部スウェーデンのスコネ地方の民家も移築している。都市化や工業化により消えていく過去の生活を国民や民族の「伝統」を示すものとして見出し、収集・保存・

展示・研究する機関として設立されたのが民俗博物館なのだが、フリーランドムセーは現実の国境線の範囲を越えて、「本来の/あるべきデンマーク」を展示しているのである。

ビジターセンターで英語のガイドブックを買い、中に入る。訪ねたのが冬の12月だったので、畑仕事はしていなかった。家畜もいない。冬の間は限定的に開館するだけなので、家畜はどこか別の場所で飼われているのかもしれない。いくつかの家の屋内には昔の衣装を着た解説をしてくれるスタッフがあり、クリスマスの飾り付けがなされていた。東ユトランド地方から移築した領主の農場の屋敷内では、昔の衣装をした女性がお菓子作りの実演をしており、また小さな女の子がお父さんと一緒にお菓子作りを体験していた。風車の横の広場にはテントが建てられ、外ではクリスマスツリーのモミの木を、中ではクリスマスの飾りやパン・チーズ・ワインなどを売っている。私もツリーに下げるサンタと魚の飾りとフェルト製の犬の指人形をお土産に買い、すっかり楽しんで博物館を後にした。

フューネン村にて

コペンハーゲンから特急のインターシティ・リユンで1時間あまり離れたオーデンセ市は、フン島の政治的・商業的な中心地であり、人口18万人ほどの都市である。アンデルセンが生まれた街でもあり、アンデルセンを記念した公園や博物館もある。このオーデンセ市の中心部からバスで10分ほど離れた郊外にある野外博物館がフューネン村である。フューネン村には19世紀のビジターセンターで購入したガイドブックはアンデルセンが生きた時代と説明している。民家や学校・風車などあわせて26軒が移築されている。ここは通年開館のためか、羊や鶏などが実際に飼われていた。馬もあり、子供が乗って楽しんでた。入り口にモミの枝を打ちつけた農家に入ると、中ではレバーペーストやハムをのせたパンが食べられるようになっている。隣の司祭の家では、昔の衣装

を着たおばちゃんに自家製のビールを振舞ってもらった。日本で市販されているビールよりも炭酸が少なく、コクのある味わい深いビールだった。さらにおばちゃんに勧められるままに、暖めた 要するにお燗をした ビールを試したり、さらにその中にパンのかけらを入れて飲んだりする。ビールで体が温まったが、何よりもおばちゃんのアットホームな対応に心が温まる。その隣の農家に入ると、中庭一杯に甘い香りがただよっていた。ここではリンゴをつぶして絞ったジュースを振舞っていた。またお菓子も試食できるようになっていた。真っ黒なケーキがあったので聞いてみると豚の血でつくったケーキだという。もちろん食べてみたが、血の味はさほどせず、普通の美味しいケーキだった。このような伝統的な料理を試食できる他にも、来館者が藁でクリスマスの飾りのヤギを作ったり、クリスマスツリーの飾りを作ったりすることができる家もあった。今回の旅行で訪れた博物館の中で、もっともくつろぎ楽しむことができた博物館だった。

おわりに

近年のヨーロッパの民俗学界では民俗博物館が国家や

地域の文化的アイデンティティを表象するための装置であることが批判的に問い直され、新たな姿へと変わろうとする動きが起きている。イギリスのウェールズ民俗博物館(Welsh Folk Museum)のように、前近代の生活である民俗に限らず、広く近代の生活も含める博物館として1995年にウェールズ生活博物館(Museum of Welsh Life)へと名を変え、さらには今年になってケルト時代からの通史的展示を行うセントファガンズ歴史博物館(St. Fagans National History Museum)へ変わったように、名称と内実が大きく変化した例もあるが、今回訪れた二つの野外博物館は、まだ近代の生活を扱うようにはなっていない。

もっともこのような博物館学的な関心以上に、今回実際に訪れることによって強く実感することができたのは、来館者たちの生活や人生の一部となっている博物館だったことである。家族連れ、特に小学校入学前の小さな子供を連れた来館者が多く、親と子が、あるいは祖父母と孫がクリスマスに訪れて楽しみながら学ぶ。伝統的な生活が生きているだけではなく、人々の生活の中にも生きている博物館の姿が印象深かった。



写真1

フリーランドムセー 移築された民家で「村」が形成されている



写真2

フリーランドムセー お父さんと一緒にお菓子づくり



写真3

フューネン村 民家の柵の中では羊が飼われている



写真4

フューネン村 みんな熱心に藁細工をつくっていた

主な研究活動

(2006年4月～5月実施分)

研究推進会議

- 第1回 4月14日(2006年度事業推進組織、国際シンポジウム実施計画(案)について 他)
- 第2回 4月19日(研究拠点形成費の実績報告書、浙江工商大学日本文化研究所との覚書締結、海外提携研究機関派遣・招聘研究者募集要項(案)について 他)
- 第3回 5月24日(海外提携研究機関派遣研究員、訪問研究員、ジョイントワークショップについて 他)

全体会議

- 第1回 4月21日(2006年度事業推進組織、研究実施計画及び予算について 他)

研究会

- 4月12日・理論総括研究班 打合せ
- 4月22日・『東アジア生活絵引』の編さん班 打合せ
- 4月24日・実験展示班 「実験展示の基本的な理念をめぐって」
- 5月10日・景観の時系列的研究班 久田 肇 / 「写真、絵画資料の著作権について 出版の現場から」(次頁参照)
・マルチ言語版『常民生活絵引』(略称)の編さん刊行班 校閲作業
- 5月17日・実験展示班 青木俊也・榎美香・中村ひろ子・浜田弘明 / 「展示構想の具体化をめぐる課題について」
- 5月19日・地域統合情報発信班 打合せ
- 5月24日・第2班 打合せ ・マルチ言語版『常民生活絵引』(略称)の編さん刊行班 校閲作業

現地調査

夏 宇継	中国 雲南省麗江(4月1日～8日)
東巴研究院において東巴踊の身体技法や前回調査の反応についての調査	
佐野 賢治、佐々木 長生	福島県南会津郡(4月16日～17日)
只見町教育委員会での只見町無文字・非文字資料のデジタルコンテンツ化についての打合せ	
北原 糸子	京都府京都市・兵庫県姫路市(4月21日～22日)
立命館大学において8月開催のワークショップ打合せ、および姫路市熊谷氏宅において関東震災写真閲覧	
北原 糸子	東京都台東区(5月8日～12日)
震災記念堂写真所蔵室において災害写真調査	
君 康道	京都府京都市・大阪府大阪市(5月13日～14日)
京都国立博物館、四天王寺において「絵巻物による日本常民生活絵引」マルチ言語版作成のための資料追加調査	
金 貞我	京都府京都市・奈良県奈良市・大阪府大阪市(5月27日～28日)
京都国立博物館、奈良国立博物館、大阪市立東洋陶磁美術館において「絵巻物による日本常民生活絵引」絵巻作品の調査	
刈田 均	大阪府吹田市(5月28日)
吹田市立博物館における企画展「千里ニュータウン展」を実験展示の参考とするため実施調査	
浜田 弘明	長崎県長崎市(5月28日～29日)
長崎歴史文化博物館において、実験展示および高度学芸員養成に関する情報収集のための視察調査	

主な研究活動

「景観の時系列的研究」研究会報告

2006年5月10日 於COE共同研究室

写真、絵画資料の著作権について 出版の現場から

平凡社で長い間グラフィックな雑誌、書籍の編集にたずさわっておられる久田肇さんをお招きして、編集サイドの立場から写真や絵画資料の著作権の問題について語っていただきました。

まず、ご自身が関わってこられた刊行物について大まかに話していただき、さらにそれに関わるなかでの、著作権、肖像権などからむ、さまざまなトラブルとその解決状況についての内容へと移りました。この研究会の概要は、いずれどこかでご紹介できると思いますので、感想を二、三述べて報告にかえたいと思います。

日本常民文化研究所所蔵のいわゆる「濫澤写真」の一般公開計画を視野に入れて、私たちは現在COEの作業を進めていますが、こうした研究会を持った理由のひとつに、「濫澤写真」自体には、実はネガが紛失していてプリント版しか残っていない、それを接写してネガを作り整理をすすめていること。また、これらの写真は濫澤敬三がなんらかのサポートをして撮影させてはいるものの、おそらくそのサポートのあり方もまちまちであり、現在ではその状況の正確な追跡調査も困難であり、その公開の際、常民研がどこまでの権利を持っているのか、明確に把握しておく必要があります。研究資料として一般公開をすすめていても、たとえばある日ネガの所有者があらわれ、本来の所有者としての権利を主張された場合のことも想定しておかねばならず、そうした場合の法的なレベルと、出版・編集現場のレベルとにおけるルール

やわきまえて現状を確認しておきたいと思いました。

「濫澤写真」については基本的には一般公開にむけての諸作業をすすめていいようですが、写真の著作権において、その法的な保護期間はすぎてもネガを所持していないということは立場の弱さであり、これはやはりわきまえておかねばならないようです。

また、この四十年ほどの間に、写真画像諸資料の所有権、著作権などは、きわめて精微に整備、認定されており、現在COEで国際版のバージョン作成がすすめられている『日本常民生活絵引』自体、もし現在、あのような刊行物が前例としてなく、白紙の状態からプランニングしようとした場合、法規的および現実にクリアしなければならない手続きはとて往時の比ではなく、実際の刊行は不可能に近いのではないと思われるほどの状況であることも認識させられました。あの時代に、濫澤敬三という人物がバックアップしたからこそ実現した企画であって、これは「絵引」のアイデア云々の次元とは別に、事務手続きに限定してみても、ある時代性、社会性を前提とした表現物だったようです。

また、「ネットでの発信などが進んでいくと、どんなトラブルが生じていくのか予測がつかない」との久田さんの言葉は印象的でした。

香月洋一郎

[なお、久田肇氏は5月31日に平凡社を退職されました。]



久田肇氏を囲んで



コラム

Column

手のひらが受け継ぐもの

本田 佳奈 (COE研究員・PD) HONDA Kana

これまで6年間、九州大学の大学院に所属し、九州各地でムラの現地調査をおこなってきた。地域に残る小さな地名(通称地名)と、それらにまつわる農・林・水産業のあり方を古老から話を聞く。それに古文書の持つ情報を補い、過去の村落像を具体的に描き出す...というのが指導教授の研究方法だった。まず現地ありきという姿勢と方法論に惚れた。

しかし、調査に行ってみると、自分が背負う2つのハンデに気づいた。1つは都会育ちで生業経験がなく、古老の話を把握する能力が著しく低いこと。最初は「通称地名」や「井堰」の意味も分からなかった。「杉皮で屋根を葺くとき、こうして、こうして、こうしたら(と手を動かす振りをして)雨が漏れんでしょ。ね?」と言われてもボカンとしていた。そして2つ目のハンデは「時代」だ。これまでの研究者は、明治生まれの人から話を聞くことができたし、旧態の景観・生業を調査することができた。今のムラは圃場整備や造林の荒廃によって景観が変化している。過疎化、高齢化、そして後継者不足。指導教授も「わたしは時代の最後を歩く」と語っている。では、昭和51年生まれのは、もう日本のムラの歴史も生業も、消え去るのを見守るだけなのか。現地調査とは絶滅種のデータブック作りと同じなのか。30年たって、それまでの調査を過去の遺物として語りたくないなあ...とも思った。

そんなころ、棚田・造林の修復ボランティアで新しい友人ができた。写真1はその一人である美穂ちゃん(31)の手だ。神奈川の市街地に生まれ育ち、今は福岡の志摩半島で小さな農園を持つ。無農薬で丹念に育てたトマトやオクラや人参は、みんなおいしい。写真2は同じくボランティア参加者の田仲君(30)の手。北九州で生まれ育ち、山に憧れて宮崎県の西米良で山師になった。ちなみに西米良の山は、「えっ、ウソでしょ?」と言いたくなるような急傾斜地だ。2人は傾斜のある作業地でも身軽だったし、作業仲間に対する目配り、心配りも身に着けていた。私たちは同世代だ。20代はじめの頃、彼らは土に根ざした仕事を始めた。ちょうど同じころ、私も現地調査を始めた。それから10年近くたち、軟弱であったに違いない彼らが、じいちゃん・ばあちゃんたちと同じ身のこなしで働いているのではないか。そして彼らの話はとてもおもしろかった。作業を終えた夕方、田仲君は鉈を丁寧に研ぎながら、西米良の山の様子を話してくれた。美穂



写真1

美穂ちゃんの手



写真2

田仲君の手

ちゃんはボランティア終了後、月に2回野菜を届けてくれた。田畑で育んだ食への思い、手間隙がもたらすありがたさをつづった、可愛いイラスト付の通信を添えて。2人が働く場所には、解決したい現実問題がたくさんある。それでもこの道を選び、黙々と日々の業を深めている。頼もしい同志を得た気分にもなり、嬉しかった。

古老は間違いなく減っていき、聞きこぼす話は限りなくある。それは承知の上で、聞き続けていきたい。滅びる生業技術もたくさんあるが、確実に受け継がれているものもある。何よりも大切なこと ヴィジョンを描き、体で実現させる力は、若者の手のひらにしっかりと受け継がれている。先ほどの2人に手を見せてほしいとお願いすると、「汚いよ〜」と照れていた。「昔に比べて何かとカサカサするようになった」とも。彼らの手のひらと、彼らが語る言葉の間には、何の矛盾もなかった。これから10年後、30年後、彼らの手のひらを写真に撮り続けたいと思う。彼らはこれから何を生み出し、どんな世界を作るのだろう。そしてどんな言葉を語るのだろう。未永く付き合っ、色んなことを教えてもらいたいなあ、と思っている。

研究担当者 紹介

2006年度より、新たに1名のCOE教員、6名の共同研究員が加わりました。

COE教員・共同研究員

氏名	所属・職名	専門	所属課題班
	共同研究員 河野 真知郎 KAWANO Shinjiro 鶴見大学文学部 教授 考古学 環境認識とその変遷の研究		
	共同研究員 佐々木 長生 SASAKI Takeo 福島県立博物館 専門学芸員 民俗学(民具学) 地域統合情報発信		
	共同研究員 刈田 均 KARITA Hitoshi 横浜市歴史博物館 学芸員/ 神奈川大学 非常勤講師 民俗学・民具学・博物館学 実験展示		



COE教員
金 貞我 KIM Jeong Ah
COE教員(非常勤講師)
日本絵画史・東洋美術史
マルチ言語版『絵巻物による日本常民生活
絵引』の編さん刊行、『東アジア生活絵引』
の編さん



共同研究員
津田 良樹 TSUDA Yoshiki
神奈川大学工学部建築学科 助手
建築史
環境に刻印された人間活動および災害の痕
跡解説



共同研究員
平井 誠 HIRAI Makoto
神奈川大学人間科学部 助教授
人文地理学(人口地理学)
地域統合情報発信



共同研究員
榎 美香 ENOKI Mika
千葉県立中央博物館歴史学研究所
上席研究員
民俗学
実験展示

調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただき、COE調査研究協力者に今年度委嘱された方々です。
2006年6月現在

氏名	所属部局・職名
泉 雅博	跡見学園女子大学文学部 教授
海賀 孝明	株式会社わらび座 チーフエンジニア
岡本 浩一	株式会社わらび座 研究員
諸井 孝文	鹿島建設株式会社 小堀研究室 上席研究員
鈴木 彰	神奈川大学外国語学部 助教授
コールマン・ティモシー	東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学比較文化比較文化コース博士課程
中井 真木	東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学比較文化比較文化コース博士課程

COE支援事務担当

4月より下記の事務員が新しく加わりました。



吉野 進
経理担当
COEの経理全般を
統括します。よろしく
お願いいたします。

海外提携研究機関

中国 浙江工商大学日本文化研究所主催によるシンポジウム「中国にみられる日本画像資料」が開催されました。

- ・開催日時：2006年3月27日
 - ・開催場所：中国 浙江工商大学日本文化研究所
- 本プログラムからは福田アジオ教授が出席し、提携について協議後、覚書を交わしました。これにより浙江工商大学日本文化研究所は本年度より新たに本プログラムの提携研究機関となりました。

カナダ プリティッシュ・コロンビア大学アジア学科主催によるワークショップ「地図・絵図・日記に見る日本近世の旅・物見遊山文化」が開催されます。(予定)

- ・開催日時：2006年8月4日～5日
- ・開催場所：カナダ プリティッシュ・コロンビア大学

編集後記

この春から旧四つの班をある程度残しつつ、十余の課題班が再編成されました。その間の状況を本誌の冒頭で紹介いたしましたが、表現や文のニュアンスなど一切執筆にお任せしました。形として不揃いな感はありませんが、最も書きやすい形をお願いしました(なお現状では執筆不可能という方が1名おられました)。また、編集・出版委員会内部からの要望で、目次を含め主な文章のタイトル及び執筆者を英語でも表記しています。この号から編集責任者も変わり私がしばらく担当することになりました。よろしくお願いたします。(香月)

試行錯誤を繰り返しながら、本誌も4年目を迎えました。今号よりデザインやページレイアウトなどを一部リニューアルした誌面になりました。体裁だけでなく、中味も充実したものになるよう、また試行錯誤の1年になりそうです。(関)